

令和6年度 横浜市 英語教育改善プラン

目標

「英語を活用しながら、あらゆる人々の多様性を尊重し、協働、共生できる人」の育成

○英語で進んでコミュニケーションを図りたいと思う児童の割合（R5：75.7%⇒R6：80%）

1. 目標に対する現状

改善が進んだ点

未だ改善が必要な点

①授業における言語活動の割合上昇

R4:87.0%⇒R5:92.5%

②パフォーマンステスト実施状況割合の上昇(R4⇒R5)

設定：92.5%⇒95.2%

③「CAN-DORリスト」設定率の上昇(R4⇒R5)

設定：28.3%⇒46.6%

公表：13.3%⇒20.3%

把握：23.3%⇒37.9%

①「CAN-DORリスト」設定率

引き続き改善の必要がある。

設定：46.6%(84.5%)⇒－37.9

公表：20.3%(58.2%)⇒－37.9

把握：37.9%(74.9%)⇒－12.0

横浜市の数値（ ）内は全国

②コミュニケーションに対する態度

昨年度に比べ、減少しているため、

要因を分析する必要がある。

R4:76.7%⇒R5:75.7%

※「横浜市学力・学習状況調査、生活・学習意識調査」より

2. 要因分析

①②本市の課題を踏まえた次の三点、「豊かなインプットと個に応じたアウトプット」、「児童と教員の明確なゴールの共有」、「ファシリテーターとしての役割」を中心に、一斉研修のみならず学校への訪問研修や市・区の研究会と連携をして授業改善を進めていることが、これらの数値に表れていると考えられる。

③①CAN-DORリストについては、昨年度よりも全ての点において上昇しているが、全国的に見てもまだ十分であるとは言い難い。作って終わりにならないよう、その活用について研修等を通じて進めていく必要がある。

②本市の計画では令和7年度に80%を目標としているが、伸び悩んでいる傾向が見られる。同調査において、「AET(ALT)が近くにいることでコミュニケーションに対する意識が高まる」という設問に対して、7割以上の児童が肯定的な回答をしていることから、AET(ALT)の活用が効果的であると考えられる。

3. 目標を達成するための施策・事業

○ グローバル社会で活躍できる人材の育成に資する外国語教育の推進

本市の外国語教育が目指す児童生徒の姿の実現を図るため、次の施策・事業を実施する。

【新規】

- ・モデル校における英語イメージ教育の実施
- ・フィールドワーク型国際交流事業（Yokohama English Quest)の小学校高学年への拡充

【継続】

- ・小学校1年生からの外国語活動の実施
- ・ALTの全校配置
- ・専科教員配置の拡充
国からの加配に加え、本市が独自で行っているチーム学年経営を活用した専科教員の創出を推進している。
- ・「生きた英語」に触れる機会の推進（英語村等）
- ・「横浜ラウンド制」を活用した授業改善の推進
「横浜ラウンド制実践推進校」において75%以上言語活動を実施している学校が50%を超えていることに注目し研修を実施する。

○ ゴールを明確にした授業の推進

- ・TTにおけるsmall talkを推進し、目的・場面・状況等を踏まえた質の高いインプットを児童に十分行うことで、児童の自然な言語習得を目指す。
- ・児童が自身の学びを調整し、自立した学習者となるため、CAN-DORリストを活用し、見通しのもった学びとなるよう、その必要性や効果について引き続き研修を行うと同時に、好事例を発信する。

令和6年度 横浜市 英語教育改善プラン

目標

「英語を活用しながら、あらゆる人々の多様性を尊重し、協働、共生できる人」の育成

○CEFR A1レベル相当以上の英語力を取得又は有すると思われる生徒の割合 (R5 : 67.2% ⇒ R6 : 68%)

○英語で進んでコミュニケーションを図りたいと思う生徒の割合その他数値目標 (R5 : 76.2% ⇒ R6 : 78%)

1. 目標に対する現状

①生徒の英語力の上昇

R4 : 66.0% ⇒ R5 : 67.2%

②コミュニケーションに対する態度※

R4 : 75.4% ⇒ R5 : 76.2%

③授業における言語活動の割合上昇

R4 : 66.9% ⇒ R5 : 74.0%

④「CAN-DOリスト」設定率の上昇

設定 : R4 : 66.7% ⇒ R5 : 75.3%

公表 : R4 : 49.7% ⇒ R5 : 51.4%

把握 : R4 : 49.0% ⇒ R5 : 54.8%

⑤小中連携に関する状況の上昇

情報交換 R4 : 62.6% ⇒ R5 : 77.4%

研究協議 R4 : 56.6% ⇒ R5 : 61.0%

カリキュラム R4 : 16.3% ⇒ R5 : 29.5%

※横浜市学力・学習状況調査、生活・学習意識調査

改善が進んだ点

未だ改善が必要な点

①R5全国学力・学習状況調査の教科／質問紙調査の結果から、「話すこと（やりとり）」に比べ、「話すこと（発表）」の正答率が低く、仮題が見られた。

②パフォーマンステストの割合

R4 : 83.0% ⇒ R5 : 67.8%

③授業における言語活動の割合

横浜市 : 74.0% 全国 : 75.1%

④「CAN-DOリスト」設定率

設定 : 75.3% (96.1%) ⇒ -20.8

公表 : 51.4% (71.6%) ⇒ -20.2

把握 : 54.8% (80.7%) ⇒ -25.9

横浜市の数値 () 内は全国

2. 要因分析

①②本市の課題を踏まえた次の三点、「豊かなインプットと個に応じたアウトプット」、「生徒と教員の明確なゴールの共有」、「ファシリテーターとしての役割」を中心に、施策として進めている「横浜ラウンド制」を活用しながら授業改善を進めていることが生徒の英語力の向上に資する授業に繋がっていると考えられる。

③生徒と目標を共有することについて研修等を通じて周知したことが増加に繋がっていると考えられる。ただ、目標値には達していないので、引き続き課題として捉えていく。

④昨年度の課題を踏まえ、研修を実施したことで、設定・公表・把握において改善が見られたと考えられる。

⑤コロナによる制限撤廃のため、連携が進んだと考えられる。特に、対面でない形での連携としてカリキュラム等での連携が進んだと考えられる。

①全国平均は上回っているものの、社会的な話題に対して自分の考えを述べる経験が十分でないことが考えられる。

②パフォーマンステストに対する認識が、教員間で異なっている可能性が考えられる。

③④ともに前年度よりも上昇はしているが、未だ十分でない状況が見られる。

3. 目標を達成するための施策・事業

○ グローバル社会で活躍できる人材の育成に資する外国語教育の推進

本市の外国語教育が目指す児童生徒の姿の実現を図るため、次の施策・事業を実施する。

【新規】

・英語弁論大会上位入賞者のNY国連国際学校への体験留学
グローバル社会で活躍できる人材の育成のため、学んだ英語を活用し、世界に目を向ける機会として上位3名を派遣する。

【継続】

・「横浜ラウンド制」を活用した授業改善の推進
「横浜ラウンド制実践推進校」において75%以上言語活動を実施している学校が50%を超えていることに注目し研修を実施する。
・英語を活用する機会の推進 (SEPRo※、English Festival等)

※2 Super English Programの略。一つの学校に区内のALT 6人が集まり、1クラス6人体制でコミュニケーションを中心とした授業を行う。

・国際都市横浜を生かした英語によるボランティア活動の拡充
・ALTの全校配置
・外部指標 (実用英語検定)の実施による生徒自身による学習改善と教員の指導改善
・フィールドワーク型国際交流事業 (Yokohama English Quest)
・市内留学体験事業 (はまっこ留学体験)
・国際スポーツ大会、会議等における英語を活用したボランティア

○ ゴールを明確にした授業の推進

・相手から求められていることを理解し、即興で自分の気持ちや考えを述べるができるよう、既習事項を繰り返すスモールステップを踏んだ授業展開の推進

・生徒が自身の学びを調整し、自立した学習者となるため、CAN-DOリストを活用し、見通しのもと学びとなるよう、その必要性や効果について引き続き研修を行うと同時に、好事例を発信する。

令和6年度 横浜市 英語教育改善プラン

目標

「英語を活用しながら、あらゆる人々の多様性を尊重し、協働、共生できる人」の育成
○CEFR A2/B1レベル相当以上の英語力を取得又は有すると思われる生徒の割合
(R5 : A2以上 93.9%、B1以上 55.7% ⇒ R6 : A2以上 95%、B1以上 56%)

1. 目標に対する現状

改善が進んだ点

- ①授業における、生徒の英語による言語活動の割合が増加
(R4:65.8%⇒R5:75.6%)
- ②生徒の英語力の上昇（グローバルに活躍することが期待される層（CEFR B1レベル相当以上）の拡充）
(R4:50.7%⇒R5:55.7%)

未だ改善が必要な点

- ①英語担当教員の授業における英語使用状況が昨年から減少した。
(R4:60.5%⇒R5:41.5%)
- ②「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の整備状況に引き続き改善の余地がある。
(R4:37.5%⇒R5:50.0%)

2. 要因分析

- ①生徒が言語活動に取り組めるような授業づくりの在り方について、研究会等とも連携し、教員の指導力向上を図ったことで、生徒の英語による言語活動の割合が増加したと考えられる。
- ②「伸びる生徒」の取組を研究、共有し、市立高校全体で考えていこうという研修を実施し、教員の理解を深めたことが、生徒の英語力の向上に資する授業に繋がっていると考えられる。

- ①授業において、文法の知識がどれだけ身に付いたか等に重点が置かれたり、説明や発問、課題の提示を生徒の分かる英語で発話するなどの工夫が図られていないことが原因と考えられる。
- ②数年前に全校で「CAN-DOリスト」を作成してもらっているが、その後見直しがされていないことが原因と考えられる。

3. 目標を達成するための施策・事業

- ①生徒が言語活動に取り組める授業実現
 - ・ALTの全校（複数）配置
 - ・外部指標（実用英語技能検定の実施）による生徒自身の学習改善と教員の指導改善
- ②身に付けた英語を活用する機会の推進
 - ・English Day Camp、Practical English（横浜市大との連携）、国際都市横浜を生かした英語によるボランティア活動の拡充
 - ・姉妹都市交流等国际交流の推進
 - ・海外大学進学支援プログラム・横浜SGHの取組
- ①言語活動に関する研修及び好事例の発信
教員が英語使用を積極的に行う目的について理解を深めるため、教育課程研究委員会や高等学校英語研究会等の活動を通して、好事例を発信するとともに、クラウド上に保存し、全ての教員の指導力の向上に活用する。
- ②「CAN-DOリスト」の整備
「CAN-DOリスト」の設定・公表について再度周知するとともに、公表することで生徒の学びに向かう意欲が高まった実践等を収集し、各種研修会で活用するとともに、クラウド上に保存し、全ての教員の指導力の向上に活用する。

目標達成状況一覧表

令和6年度様式（様式2）

横浜市教育委員会

校種	指標内容		2023		2024		2025		2026		2027	
			目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値
高等学校	①CEFR A2レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合（％）		98	93.9	98		98		98		98	
	①CEFR B1レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合（％）		52	55.7	56		56		56		56	
	②授業における、生徒の英語による言語活動の割合（％）		90	75.6	90		90		90		90	
	③スピーキングテストとライティングテストの両方を実施した割合（％）		45	51.2	52		52		52		52	
	④「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の整備状況	設定（％）	100	62.5	100		100		100		100	
		公表（％）	100	50	100		100		100		100	
		達成状況の把握（％）	100	25	100		100		100		100	
	⑤CEFR B2レベル相当以上の英語力を有する英語担当教員の割合（％）		85	92.6	90		90		90		90	
	⑥英語担当教員の授業における英語使用状況（％）		90	41.5	90		90		90		90	

校種	指標内容		2023		2024		2025		2026		2027	
			目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値
中学校	①CEFR A1レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合（％）		68	67.2	68		69		70		71	
	②授業における、生徒の英語による言語活動の割合（％）		90	74	80		80		83		85	
	③スピーキングテストとライティングテストの両方を実施した割合（％）		80	61	80		80		83		85	
	④「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の整備状況	設定（％）	100	75.3	80		90		90		100	
		公表（％）	80	51.4	60		70		75		80	
		達成状況の把握（％）	80	54.8	60		65		70		80	
	⑤CEFR B2レベル相当以上の英語力を有する英語担当教員の割合（％）		60	58.3	60		60		60		60	
	⑥英語担当教員の授業における英語使用状況（％）		70	66.4	70		72		75		80	

校種	指標内容		2023		2024		2025		2026		2027	
			目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値
小学校	「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の整備状況	設定（％）	80	46.6	60		70		75		80	
		公表（％）	55	20.3	50		60		62		65	
		達成状況の把握（％）	60	37.9	50		60		62		65	